

第 6 回企画調整会議での意見（最終報告に向けた整理・検討事項）

1 第 1 章 1（1）審議テーマにおける地域について

・第 6 回企画調整部会資料での表現

本テーマにおける「地域」とは、子ども・若者の育ちに必要な家庭や学校以外の場を指す。

・事務局の考え

地域の概念には、家庭や学校が含まれていると認識していますが、地域づくりを考える際には、家庭、学校以外で子ども・若者の育ちに必要となる場はどのようなものがあるのかを考えていきたいとの思いから上記の表現をしました。

委員の皆様から「地域」の表現に関する御意見をいただき、再検討し、第 1 章で地域を定義づけることはせず、地域のあり方を提言のひとつとして御議論いただきたいと考えます。

<関連意見>

- 地域の概念の中に関係概念が入ってない。場を指すと書いてあるのは良いのですが、何か関係性を含むというのを、仲間と一緒にでもいいし、生活の中で、生活は共同でありますから、生活の中でとか、そういう言葉が地域という定義の中に必要じゃないかと思います。（笹井会長）
- 地域には、いろんな方がいろんなイメージを持つと思うのですが、必ずしも、従来の伝統的な地域共同体とは限らない。育てあげることができている、ちゃんと世代が循環していく。互いに助け合っているというのが日常的にちゃんと見えるように展開しているとか、ちょっと今想像しにくくなっている、都市化している中では、特にそうなっている。（萩原副会長）
- 皆さんの話をお聞きしてイメージするのは、昔は大家族で、親戚の集まりで育まれた人間関係が、叔父、叔母であったり、祖父母、いとこであったり、いろんな人たちの中で切磋琢磨して生きてきたものがあるので、笹井先生が御発言された生活とか暮らしの中で育むことを地域というのではないか。（藁田委員）
- 本テーマにおける地域とはというところで、子ども・若者の育ちに必要な学校、家庭以外の場を指すというところで、ここがちょっと僕として引っかかるところで、多分、子ども、若者の育ちに必要なもの、家庭とか学校というのは、地域とは離れていないもののかなと、僕はすごく感覚としてありまして、変な話、学校という表記だけではなくて、教室だったらまだわかります。教科指導をする部屋、教室は、学校の教室として独立していると思うのですが、それ以外の学校の中でも、放課後だったり、登下校だったり、そういうところは、地域に含まれるのではないかと、僕はすごく感じてありまして、「以外」としてしまうと、家庭と学校は地域と離れてしまうのではないかという怖さが、僕はこれを読みながら感じました。（村田委員）
- 地域の概念に関して、教育基本法第 13 条に、学校、家庭及び地域住民その他の関係者の連携協力が努力義務ですよという規定があります。その時に、地域じゃないか、地域住民のまま

いいのかという議論がありました。最終的には、学校、家庭及び地域住民等の連携協力となり、教育基本法では地域住民という言葉を使っている。

それはどうしてかという、ベースが地域にあって、学校も家庭も地域住民も地域に乗っかっているという考え方からです。二段階をとっている、住む地域がベースにあって、学校と家庭と地域住民が連携することで子どもが豊かに成長しますよという論理を取っているわけです。これは今回にもすごく関連していることですし、参考になると思います。(笹井会長)

- 資料の家庭、学校以外というこの辺の表現を少し変えていただくといいのかもしれません。実際、今、放課後の学校、放課後だけではなくて、地域学校コーディネーターが間に入りながら、コミュニティスクールに来て、だんだんその辺の境界線がなくなっているところがあります。どちらかという、むしろ地域コミュニティをある意味再生させる一つの拠点として今学校に期待をしているという流れの部分もあります。そこを踏まえた地域の表現を御検討いただければと思います。(萩原副会長)

2 第1章 2 本報告書の目的・対象者 若者の年代について

・第6回企画調整部会資料での表現

本報告書は、若者（主に思春期及び青年期の10代から20代）、地域とのつながりを重視する観点から多様な世代の方及び地域活動実践者を対象として、本報告書の内容を県民に広く発信する。

・事務局の考え

青少年行政における若者の年代については、幅広く設定されています。本報告書では、中々地域と接点を取りづらい「主に思春期及び青年期の10代から20代」の若者をメインターゲットとし、再度地域と接点を持ち始める年代である30代も地域との関わりにおいて本報告書を参考としていただける対象と考えています。

<関連意見>

- 多世代ワークショップで20代が一番自分の大切にしたいことは、内側にベクトルが向いていましたが、まずは自分を成長させる。そして就職すると最初の1、2年目は忙しい、仕事もあって、ちょっと落ち着いた位の20代後半から30代前半位が、家庭をもち始める方々も増えて、その辺りからやっと自分が住む地域に対して、自分が何ができるのかと、1回、間が空いてまた戻ってくるような感覚があるので、若者による地域づくりのカタチと言ったときに、何をもって地域づくりに参画しているかを見るかというのもあると思います。25歳から30代前半、35、6歳ぐらいまでの10年間ぐらいの世代も、ここに仲間として入れると、凄くいいのかなと思いました。初めて地域と繋がる機会がやってくる。(山田委員)
- 社会的役割が、程度の問題ですが若干固定化される。ところが、10代は無限の可能性がある、20代になってもまだ可能性があって、自分の社会的役割をどこに見いだすか、自分で作ってもいいし、それを選択する自由もある。

ところが、30代になってくると、もちろんそうでない人もいますが、若干それが狭まる、あるいは固定化される。結婚したらもう地獄だという人もおりますけども、それは極端な例としても、役割が完全に決まり、良き夫、良き父親といった役割を担い、会社の中で言えば係長や課長代理の仕事になるというように狭まっていく。

地域を作る、特に社会参加の部分に関して言えば、自分で役割を選択する、自分で作るということが基本だと思います。それが狭まってくると、確率というか、可能性としては30代、40代、歳をとるに従って、本人の意識は別ですが、でも客観的に見れば、歳をとるに従って、それが狭まるのだと思います。（笹井会長）

- 特に、地域社会を作っていくといったときに一番もしかしたら、はじかれているというか、今、関わりにくくなっているのは、この10代、20代。

子どもというのは、例えば子ども会、ジュニアリーダーとか、そんな形で小、中学生くらいですと、まだ地域がその年代には目をかけているということがあります。ですが、中学を出て、高校生、大学生の年代になると、すぼんと抜けていく。今のライフスタイルだとそうなります。ある意味そこにあえて光をあてていかないと、という意識が根底にあるかなと私は理解しています。（萩原副会長）